少女よぬいぐるみを抱け

はじめに

わたしはあの１０ヶ月間のことを一生忘れません。いや、決して忘れてはいけないのです。あの頃の日記を捨ててしまったとしても。これからも忘れないように、覚えておけるように、ここにわたしの少女の青春の記録を綴ります。

簡単な説明ですが、わたしは子供の頃、広汎性発達障害のアスペルガーと診断されました。感情のコントロールがうまくできなくて、小さな頃から毎日のように泣き叫んでいました。小学1年生から不登校になり、その後も長い間学校にはまともに通えませんでした。強迫性障害も併発してしまい、手に汚れがついた感覚が取れなくてせっけんで手がかぶれてしまうほど何時間でも手を洗っていました。お風呂も同様です。家族と些細なことでぶつかったり、母への確認行為も日に日に酷くなったり、家での生活が困難になったので小児の精神病院に入院することになりました。その頃のおよそ１０ヶ月間の入院生活の思い出、または備忘録です。

♡

はじめに
かなしみのプレゼント
入院中の1日のスケジュール
お休みの日
カウントダウン
王女じゃないからアイスクリームを食べる
おそろいのヘアゴム
憧れのメゾピアノ
思考回路はショート寸前
ぬいぐるみ禁止令
ルール
運命フレンズ

ノスタルジー
ふくらむスカートの中身はひみつ
モーニングコール
おしゃれはお預け
いじわるは蜜の味
女の子のシャンプー
返ってこないプロフィールシート
恋に恋するお年頃♡
夜のサナトリウム
サンクチュアリ
ハート型おりがみ
ストロベリー・キッス
生意気ベイビーブルー
あまやかなリボン

ぴゅあぴゅあメール
ことば仕合せ
さくら柄の浴衣
すれ違いジレンマ
わがまま姫
土日の病棟
トラウマ
ママの後日談みたいなもの
ワンピース
おわりに
あとがき

ぬいぐるみ禁止令

入院生活でいちばん辛いことと言えばぬいぐるみと寝られないことでした。入院する時にそれだけが気がかりで(そのほかもあるけど)さみしい気持ちがより増幅しました。ハウスダストアレルギーを持っている子がいる場合もあるから持ち込み不可でした。ぬいぐるみを汚いもの扱いするみたいなのやめて。ちゃんと洗えば大丈夫では？そしてまたもや素直に規則に従うわたし。でも規則を破って持っていったところで多分没収されて終わりだったと思う。下着の中に隠すとかじゃないと見つかる。。牢獄か、ここは…。

わたしは小さい頃からずっとぬいぐるみと寝ていて、生まれた時から一緒で、色んなぬいぐるみを買ってもらいました。多分１００体近く所有していたのではないかと思います。人にあげたり、捨ててしまったものもあるけれど、気づけばいつもわたしの周りにはぬいぐるみ達が佇んでいるのでした。お人形も好きだけれど、どちらかといえばぬいぐるみ派でした。お人形は繊細そうで脆いから、あまり強く抱きしめると壊れてしまいそうですこしこわいです。それにお人形は愛でるというよりも、自分がなりたい、憧れという感情で、自分の中の少女像、ヒロイン、という存在に近いです。じゃあぬいぐるみにはなりたくないのか？と言われれば、あわよくばちょっとなってみたいというのが本音です。人間ってちょっと汚いしね。成長するし、完璧じゃないし。でもいつかスーパードルフィーをお迎えしてロリータ着せまく

りたいなーっていう願望もあります。入院したのはまだ子供だったので、ひとりで寝るのは寂しくて、ぬいぐるみも一緒に連れて行きたかったです。家族と離れてひとりで心細い上に縋るものもなくて絶望でした。ぬいぐるみがいてくれたら、その子と一緒に寝ることができたら、さみしさもすこしは吹っ飛んでくれるかと思ったのに。でもいつのまにかいないことが当たり前になって、いなくても眠れるようになって、気にならなくなりました。でももちろん外泊でお家に帰った日はぬいぐるみと寝ていました。ちなみに高校の時の修学旅行にもぬいぐるみを持って行きました。今も一緒に寝ます。おばあさんになっても多分わたしはぬいぐるみと寝るのでしょう。

ぬいぐるみは愛を込めてぎゅっと強く抱きしめるとぬいぐるみの身体からほんのりとぬくもりが返ってくる気がします。

ふくらむスカートの中身はひみつ

わたしのいた病棟は、決まりで、スカートを履いてはいけないことになっていました。理由はたくさんの男の子からスカートめくりをされないようにです。納得できない。子供だからって許されているのがおかしい。大人だったら犯罪だからね。なぜこっちが気をつけないといけないのかわかりませんが、スカートが履きたいなーとずっと思っていました。だって、スカートの方がかわいい。ふわふわしていて女の子らしいし。ワンピースも着たかったな。なので、わたしを含め女の子は全員いつもパンツスタイルでした。レギンスもNGなので、チュニックを着て、ジーパンとか、短いショートパンツ、ホットパンツ？みたいなのをよく履いていました。少しでもかわいくしようとトップスはパフスリーブになってるものとか、ちょっとしたところがガーリーだったりするデザインを選んでいました。その頃は今よりも全然痩せていたし、脚は昔から長いと言われていたので、ショートパンツは似合っていたと思います。かわいいチェックの柄で裾にふわふわがついているものや、淡い水色の生地にこれもまたフリルがついていたりするショートパンツなどが一等お気に入りでヘビーローテーションで履いていました。少し長めのワンピースみたいなトップスに下に短めのショートパンツを履き、見た目はワンピースでもちゃんと履いてるよーん♪みたいなコーデも組んでいました。ナースには注意されたけれど。もう、うるさいな！ショートパンツは履いていいことになっていましたが、それでも、座った時に下

着がみえていて、男の子に見られるということがありました。もう、おとこのこってほんといや！長ズボンしか履けないじゃない。でも今はスカートをたくさん履けるのでうれしいです。退院して一番嬉しかったことといえばそれかも。パンツスタイルなんてロリータファッションと対極にあります。今はフリフリでレースたっぷりのジャンパースカートを着て、頭には生クリームみたいなヘッドドレスを乗せて、ハートのバックルのついた厚底を履いて、おもちゃのようなハートのバッグを持って、ケーキのようにあまくデコレーションしたわたしがだいすきです。

サンクチュアリ

お庭にある古びたブランコがだいすきでした。よく遊んでくれた保育士さんはブランコに乗ると酔うんだよね〜と話してくれて、それを聞いたらわたしもすこし酔うような、そんな感じもしたけれど、でもブランコに乗って漕いでいると風をきって、みんな、子供たちの声が遠くへ聞こえて、空も雲も風も草や木、そしてお花もぜんぶ自分だけのものだと思えて、ブランコは自分だけの世界へ入れる秘密の乗り物でした。いつかはいなくならなくちゃいけないそんな考えがぽっと胸の中に芽生えて、でも、ブランコからは降りたくなくて、降りられなくて、ずっとこのまま退院せず、ブランコに揺られながら最後はタンポポの綿毛のように、鍵のかかった病院の外へ飛んで行けたらな。そして天国まで届いたらな。そんなことを思っていました。でも、ずっと病院にいることはできなくて、いつかは、みんないなくなる。顔と名前しかしらない人たち。住所や個人情報などは一切交換してはだめ、人の持ち物も触っちゃだめ。触っていいのは、手や指や存在している身体だけ。わたしは退院したあと、数え切れないほど、また入院したい、再入院したいと思った。今でもまたあの甘美なサンクチュアリに足を踏み入れたいと思ってしまうのです。不謹慎で、不健全なことはわかっている。でもあの守られている幼稚美な空間を一度でも味わってしまったら、もう普通の社会へなんて戻れっこない。だって、わたしたちは、そんな普通の世の中に適合できないから、病院に入れられたのだもの。誰にも理解されずに自分

だけの孤独を抱えて、此処へやってきた。みんな同じなんだよ。わたしも退院してから色々頑張ってみたけれど、やっぱりみんなの言う〝ふつう〟には結局なれなかった。とても心地の良い場所だった。はじめてできた居場所だったの。もう戻れないけれど。ずっと守られて生きていくことはできないんだね。人はひとりなのに、ひとりでは生きていくことができなくて、とても無力でちっぽけなんだ。わたしはわたしのできることをやればいいよね。たのしいこと、しあわせなこと、それだけで十分な人生だけれど、甘やかされていただけで人生を終えることはできない。わたしはいつか、入院したいと願うことをやめられるかな。ひとりでも大丈夫、どんなに世界の片隅に追いやられてもこの世界で生きていける、とそう思えるかな。思えるといいな。旅立ったみんなも、元気でいてくれたらいいな。

「一時帰宅」

もやもやもや
もやがかかった朝の空
氷が溶けて霜ができて
最低気温３℃思い出す閑散とした院内公園
ほったらかしのブランコが怒っている
あの１０ヶ月間は夢のようにも、祈りのようにも思えるよ
星を紡いで　太陽と繋げて　月のコンパス
朝と夜が真っ逆さま
学校への近道は
空から繋がっているなだらかなスロープ
プライベートとの境界線がわからなくなった玄関をあけて
もう帰れない　菱形の勉強机

きょうはエビフライかな

お昼ご飯　おうちで食べるの夢だった